

アラブの春かイスラームの目覚めか、イランの立場；レジメ

20151027

I イラン！ なぜ？

(1) イラン革命（1979年）は、それまでの世界的通念に挑戦。近代西欧的価値と一線を画す挑戦。いや時代錯誤・中世返りか？

(2) 特異なる統治体制の理念:イスラーム法学者による守護、その思想的系譜、プラトン「国家」の哲人王→イスラーム哲学→ムッラー・サドラー [17c] の神秘主義哲学（イルファーン）→ホメイニー師（1902-1989）→イラン革命後の体制の背骨。

結語：「ヴェラーヤテ・ファギー：その心は羊飼いと羊の群れ」！！？

（羊飼い←イスラーム法学者にして最高指導者、羊たち←信者にして国民）

II 「アラブの春」か、「イスラームの目覚め」か

(1) アラブの春；2010年12月17日、チュニジアにて失業中の青年が果物野菜を街頭販売、販売許可なしと婦人警官が阻止。抗議で焼身自殺。→失業問題、発言の自由化、大統領周辺の腐敗などに抗議のストライキやデモ。→23年間続いたベン＝アリー政権崩壊しベン＝アリーはサウジに亡命。

ヨルダン；早い段階で反政府運動が飛び火、S. リファーイー内閣が総辞職（2011年2月1日）。エジプト；1月25日より大規模な反政府抗議運動が発生、30年以上に亘るムバーラク大統領政権が崩壊（2011年2月11日エジプト革命、2012年5月、ムスリム同胞団のムハンマド・ムルシーがエジプト大統領に選出、2013年7月シーシー国防相のクーデター、サウジがクーデター政権を支援）。バハレーン；2011年2月、改革を求めるシーア派住民を中心とした反政府派デモが発生（警察治安部隊との衝突が多発。同年3月にはGCC（Gulf Cooperation Council：湾岸協力理事会）の合同軍（サウジ軍）がバハレーンに入る。国家安全事態（非常事態）宣言、シーア派住民が多く住む地区を中心に強制捜査、大量逮捕、

勾留や解雇される。国家非常事態宣言は同年6月1日に解除。

シリア；2011年4月、民衆蜂起が飛び火。2011年6月、トルコがムスリム同胞団との和解をシリアに強要、拒否される(同8月)とトルコは反体制派支援に姿勢転換。2011年6月、中立報道で定評あったアルジャジーラが反シリア政権へと報道姿勢を変える。同8月米国がシリア大統領アサドの退陣要求、英仏独カナダも。2012年8月、サウジ、カタール、トルコによる反アサド陣営が鮮明に浮上、2012年9月、シリア反体制派に武器供給が強化され(サウジとカタールはトルコ国境経由、ヨルダンがその国境経由、レバノンからもその国境経由で武器搬入)、軍事行動を活性化。米政府もこれに肩入れ。

(2) 「・・・の春」？「イスラームの目覚め」←ハーメネイーの言及、←ホメイニー側近はイラン革命を「天性の目覚め」によると論じる。

(a) ホメイニー遺言の一節「イスラーム諸国の諸国民たちにむけての我が遺言は次の通りである。あなたたちの目標、つまりイスラームとイスラーム法の施行という目標、これを達成するのに誰かが外部から助けの手を出すと期待してはならぬ。あなたたち自らが立ち上がり、この自由と独立を実現せねばならぬ。イスラーム諸国の宗教的権威や[庶民の中の]説教師たちは、その政府に呼びかけ超大国への従属とその軛から脱し[超大国に代えて]自国民と意思疎通をするように呼びかけよ。さすれば勝利を手にしよう。諸国民に団結と連帯を呼びかけクルアーンの教えに反した人種差別を避けるべきである。国境も人種も越えた信者同胞との友好関係を持つべきである。この信仰上の同胞関係が実現した暁に、ムスリムが世界でもっとも偉大なる勢力を形成するのを目の当たりにしよう。・・・」。

(b) 今日の最高指導者：ハーメネイーの言(2011年9月17日、『イスラームの目覚め』国際会議における演説からの抜粋要約)。

「(1)イランのイスラーム革命とそれによる王制からイスラーム共和制への転換、今日のイスラームの目覚めに至るその影響：考察や討議に価する。(2)アラブにおけるイスラームの目覚め[アラブの春]の本質；それはあらゆる層に及ぶ民衆(自主的)参加の点にある。それは民主的な革命である。独裁的で傀儡的な支配者を存続させようとしてきた大国は、その希望が持てなくなると、傀儡への支援をとりやめた。エジプトは、イランのイスラーム革命を受けて繋ぐもので、周辺のチュニジア、イエメン、リビア、バハレーンも同様である。それらに共通の特徴は、イ)欧米の政治的支配と墮落した支配者の独裁によって踏みにじられた民族の尊厳と栄誉の回復。ロ)古来よりの国民の拠り所である

イスラームへの回帰。ハ) 二世紀にわたる欧米の支配と影響力への抵抗。そして彼らが突きつけたシオニスト政権 [イスラエル] との闘争。

こうした運動は、欧米やシオニスト体制の肯んじるところではないが、運動の担い手は国民であることに注意しなければならない。

覇権大国 [米国] の傀儡である支配者からの解放は民衆自身の手による、∴民衆が自らの支配者を選び、∴それぞれ各国の状況の応じた『イスラーム的社会』を構築する「イスラーム的民主制」が必要」と、彼は説く。

・「イスラーム的民主制」?! → 例: アフマド・ヴァーエズィの理論

(a) 概要; 自由民主主義とよく言われるが、自由主義と民主制は、元来、性質を異にし、両者間には齟齬がありうる。例えば、民主制の多数決制によって自由主義の基本に反する議決する恐れなど。そうした事態を避けるために、不変の原則として各個人による善あるいは幸福追求権を憲法にて保証する。この原理と枠組を使うことで、イスラーム社会でも、イスラーム民主制を構築できる。

・イスラーム社会にとり不可欠で不可変なる特性; イ) イスラーム法の施行、ロ) 勸善禁悪に基づく社会的健全性の保持、ハ) 人間の真の自由実現を可能にする条件 (近代西欧の自由は個人の自由を最重要視し、各個人の願望にとって阻害要因がないことを自由とみる (消極的自由) ←→イスラームでは、そうした願望を持った自己の制御で、自己浄化すなわち精神的に己れを高め神に近づく; 換言すれば現世的世俗的欲望への隷属状態からの解放、という意味での自由。これを具現可能にする社会環境)。

・こうしたイスラーム社会の基本的原則が民主制のいわゆる多数決原理によって侵害されないように憲法で守られたのがイスラーム民主制。→ ハーメネイーはこの考えから、核交渉合意後、米国との関係改善への期待が高まりつつあった時に釘を刺した『米国との交渉は禁じられる』と (2015,10,07) 後述)



(3) 周辺の反応； 周辺諸国は革命イランに猜疑心。∵イラン革命で、世界に革命を輸出するとのスローガンを掲げる（・イスラームの防衛、・被抑圧者の庇護→パレスチナ問題、・世界/現世を貪るものとの闘い→米国）。

また、サウジ、クウェイト、バハレーンでは、イランと同じシーア派教徒たちを少数派として抱え、彼らによる騒擾と緊張はイラン・イラク戦争終結まで断続的に続いたため不信感が根強い。

加えて、サウジを初めとして、これら湾岸アラブ諸国は、部族社会を背景とする首長君主制で、民主的要素は薄い←→「イスラームの目覚め」のイランの主張；「欧米の傀儡で独裁的な政権に対する民衆の蜂起」。

湾岸アラブ諸国（GCC 諸国）の国勢表

GCCは1981年5月、サウジアラビアの主導でペルシア湾岸の伝統的世襲制国家6カ国が結成した。表向き、経済協力を看板に掲げていたが、実際は革命イランを念頭に置いた安全保障問題が関心の核と見られた。

サウジアラビア、（1929年のワッハーブ主義の建国の戦士イフワンを弾圧後1932年建国 ∵「修正ワッハーブ主義」として本来のワッハーブ主義の立場から挑戦を受ける懼れに晒される。かたやその頸動脈にあたる油田地帯の住民はシーア派（ワッハーブ主義が異端・非ムスリムと見なし、イランの手先と疑う）が居住、この板挟みのジレンマにサウ

ジは立つ)。政治機構；国王が閣僚会議を主宰、重要ポストは王族が占める。湾岸危機後、内政改革を求める国内の動きに応じて、1992年3月、統治基本法、諮問評議会法及び地方制度法を制定。1993年12月に評議会開設。1995年8月、大幅な内閣改造を実施。2005年2月～4月に地方議会選挙を実施。

| | 自国民 | 外国人 | 合計 [単位：1,000人] |
|----------------|--------|-------|----------------------------------|
| サウジアラビア | 13,702 | 5,308 | 19,010(≒1千900万人、内 シーア派推定6% 35万人) |
| アラブ首長国連邦(UAE) | 597 | 2,090 | 2,696 (≒270万人、内 シーア派7% 6万人) |
| オマーン | 1,642 | 614 | 2,256 (≒230万人、内シーア派0.1% 千人) |
| クウェイト | 759 | 1,450 | 2,209 (≒220万人、内、シーア派20% 27.1万人) |
| バハレーン | 382 | 238 | 620 (≒62万人、内シーア派70～98%) |
| カタール | 210 | 312 | 522 (≒52万人、内シーア派20% 5万人) |
| GCC 合計 | 17,292 | | 27,313 (≒2千730万人) |

数値の出所が異なるため必ずしも整合性を持たない。一つの目安として。

その他主要国の人口；イラン：7745 万人、トルコ：7493 万人、イラク：3342 万人、エジプト：8206 万人 イスラエル：806 万人

(4) **イスラーム国 (IS) 浮上**；ワッハーブ的イスラームの目覚めかーイランの言う「イスラームの目覚め」への意趣返し！？

サウジとイランは革命後にサウジ油田地帯のシーア派の騒乱、メッカ巡礼時のイラン巡礼デモとサウジ官憲との摩擦などで緊張→**イ・イ戦争停戦後になって 1990 年代約 10 年は雪解け友好的関係。**→しかしアフマディネジャードがイラン大統領 (2005-2013) 就任、そして 2011 年「**アラブの春**」、とくにバハレーンとシリアがその俎上に登ると関係は再び緊張。この間、イラクは米国による 2003

年のイラク戦争で事実上イランの影響下に (∵イラクのマリキ政権は 2011 年のバハレーン騒動でシーア派を支持、また、**OPEC** でイランの石油政策に加担→これでサウジはイラクがイランの衛星国に化した証と見た、←サウジはイ・イ戦争(1980-88)でイラクに莫大な支援したにもかかわらず、この (サダム後のイラクの) 状況はそれに釣り合わないとの不満を抱く、とイラン専門家は分析する。

2011 年末 米軍がイラクから撤兵。サウジはバハレーン、イエメン、レバノンで「**アラブの春**」の騒動もあつたばかりで、加えてまたその秋には「**イスラームの目覚め国際会議**」をイランが主宰 (欧米傀儡の抑圧的当域政権への民衆蜂起を説く)。サウジは**イランの影に懸念と危惧の念を強め**、ヨルダンもイランからイスラエルへと触手を伸ばすシーア派とイランの影に懸念、イランのこの伸びる影にくさびを打ち込むべく、その要：「**シリアのアサド政権**」打倒を画策 (イランは欧米・イスラエルの抵抗枢軸として、イラン、シリア、レバノンのヒズボラー [後にロシア、中国?] の抵抗枢軸を形成、←対→ サウジは、カタール、ヨルダン、トルコ、さらにイスラエル、欧米と繋がる軸を形成)。

2013 年秋、シリア政府の化学兵器使用疑惑浮上、米国の対応を巡り、サウジ

が米国への不満を募らせる（8月21日、化学兵器使用による市民の犠牲者が出たことで米国はシリアへの軍事的懲罰の構えを見せたが、シリアはロシアの助言で化学兵器の廃棄を2014年6月末までに行うとした。これに米国も応じて、軍事行動の構えを解いた）。米国への不満を抱きつつサウジや湾岸アラブ諸国はこの後、シリア反政府勢力への軍事的・資金的支援を競い合って増強し、彼らの過激化を促進させた→2014年6月末「イスラーム国」樹立宣言。

Ⅲ まとめを換えて

（1）若干の所見：

- ・日本で見聞する報道にはしばしば（サウジ・カタール:アル=ジャジーラ寄りの）偏りが見られ、客観的判断や分析に支障。
- ・イランは、シリア問題を巡って、イランも含めた当域主要国の会議開催を主張（イラン中東研究所）→← サウジはこれを無視、アサド政権の退陣に固執。
- ・イランはイスラエル問題を前面に押し出しイスラーム内部の団結を説く、これに対してサウジはカタールと共にイスラエルと交渉しつつ、イスラームの宗派抗争を前面に押し出す。
- ・ISの奇異な現象に耳目を奪われがち、しかし、背後に、イラン革命とそれ以後の周辺域での基本的な問題（西欧近代以前の価値観:イスラーム的価値観への回帰:本来の自己への回帰志向）がある。しかし、これはイランとサウジ間の、あるいはシーアとワッハーブ主義の違いと確執と化し熾烈化。
- ・別の評価：「アラブの春」→イランが「イスラームの目覚め」と読んだことが触媒となり、ワッハーブ的なイスラームの目覚め：ISを惹起。

(2) 対応：まずは対処療法から、例、サウジ&欧米諸国によるアサド政権の退陣要求は譲歩可か？否か？（歴史的に見ればアサド政権とサウジは不倶戴天の関係ではない。僅か10年前の2005年に、親サウジで、シリア軍のレバノンからの撤兵論者だったレバノン首相ラフィーク・ハリリーが暗殺されたことで悪化）。片方のイランであるが「アラブの春」は民衆蜂起であってイランの関与はなしとする。しかし「イスラームの目覚め国際会議」は、(サウジなど) 欧米大国傀儡として民衆を蔑ろにする(とイランは見なす) 体制への民衆蜂起を応援。たとえ蜂起初期段階にてイランの直接介入が無かったとしても、後の言辞にて民衆蜂起を応援し煽れば、当該政権からの不信と敵意は拭えない。双方の譲歩・歩み寄りにはこれらの点での再考も！

←1990年代のイランはサウジと蜜月関係を持った経験がある。

対処療法の次の段階として；より根源的問題への取り込み、例 (1) イランと米国との関係改善問題、(2) パレスチナ問題など。

米国イランとの関係改善問題について

1988年11月25日、米国はイランとの関係改善を求めた。ホメイニーは「狼と羊の和解はない」と述べて拒む。これにラフサンジャーニー付言。「米国には過去の過ちを認める勇気がない、関係改善のために付する条件は独裁的植民地主義思考の除去である」と。つまり、例えばかつて1953年の米国画策のクーデターによるモサッデグ政変に示されるイランへの介入と侵害の歴史に関して単に謝罪すれば済むわけではなく、現在もなお米国が持つ、独裁政権を介して国民を抑圧的に支配し、その精神を朽ち腐敗させる植民地主義の思考を取り払うことを指す。

ところで、若干ここで、神学部的な言及のお許しを！ホメイニーあるいはシーア派の重視する宗教的見解によれば、人間は神の傍の天使の高みまでのぼることができる一方で、獣の地位にまで墮ちる中間の位置に立ち、そこでイスラーム法を守り、神の光の導きに従って、人間としての完全さの高みまで精神的にのぼるように神は導かんとしている。しかしこれと逆向きに、米国など大国は抑圧的

